

アリ(前年ハ帳簿焼失ニ付見合セタリ) 實業學校教員養成規程ニ依リ毎月學費トシテ一ヶ月金五円ヲ補給シタルモノ一人ニシテ其數前年度ニ同シ

圖画師範科生徒ニハ學資トシテ毎月金六円ツ、ヲ支給ス 本年度支給人員ハ五十七人ニシテ前年度ニ比スレバ三人ヲ減セリ

大正二年三月末卒業スベキ各本科撰科生徒ニシテ實地修學ノタメ大正元年九月二十日ヨリ三週間ヲ以テ助教二人囑託一人雇一人ヲシテ之ヲ引率セシメ京都奈良滋賀和歌山ノ一府三縣へ出張シテ美術上ノ研究ヲナサシメタルコト前年度ニ同シ

大正二年三月末卒業スベキ圖画師範科生徒ヲシテ實地授業法調査研究ノタメ大正元年十月廿六日ヨリ九日間ヲ以テ教授一人ヲシテ引率セシメ京都大阪ノ二府奈良三重ノ二縣へ出張セシメタリ

本校ハ皆通學ナルヲ以テ寄宿舎ニ関シテハ申報スベキコトナシ

将来施設上重要ト認ムル件

- 甲 留學生増派ノ件〔三十九ノ四十四年度報告〕  
告と同文につき省略。
- 乙 生徒實地研究費増額ノ件〔四十一ノ四十四年度報告〕  
四十四年度報告とほぼ同文につき省略。
- 丙 建築科特置ノ件  
四十四年度報告とほぼ同文につき省略。末尾の「予算請求年度「四十六年度」が「大正三年度」  
と書き替へられただけである。」
- 丁 寫真及製版科新設ノ件〔四十四年度報告とほぼ同文につき省略。〕
- 戊 陳列館新設ノ件〔四十一ノ四十四年度報告とほぼ同文につき省略。〕

生徒實験ノ資ニ供スルタメ諸所ノ依頼ヲ受ケ製作ニ従事シタルモノ、中重ナルモノヲ舉グレバ左ノ如シ

依頼製作品一覽

品名	數量	受託年度	本年度内竣工ノ別	依頼者
頌德表掛額	壹面	本年度	未竣工	農務省
府縣聯合共進會賞牌	百貳拾個	同	未竣工	
				組

明治四十五年 東京美術學校年報  
大正元年

乙款 〔火災による特に申報すべし事項のみを掲載する。〕  
其他經濟上特ニ申報スヘキ事項

一 本校火災後ニ於ケル復旧費ハ既定ノ本校校舍改築費ニ追加セラレ明治四十四年度及四十五年ニ於テ全部復旧スヘキ管ノ處四十五年ニ於テ豫算繰延トナリ僅カニ金貳千円ノ令達アリシノミ 從テ本年度ニ於テハ全部復旧スルコト能ハサルノミナラス 經理上非常ニ差支ヲ生セシモ幸ニ前年度ヨリノ繰越金壹千三百五拾餘円アリシヲ以テ應急ノ處置ヲ採ルコトヲ得タリ

『東京美術學校校友會月報』記事抜粹  
東京美術學校近事〔一〇—五。M・四五年二月一日〕

○教授諸氏の陞等 教授海野美盛氏は高等官四等に、教授沼田勇次郎、小堀鞆音、福井信之進の三氏は、各高等官六等に、孰れも昨年十二月二十六日陞叙せられたり。  
○勳等の陞叙と初叙 教授川端玉章氏は勳四等に陞叙せられ、教授

白濱徹、島田佳矣の兩氏は、勳六等に敘せられ、何れも十二月二十  
六日付にて發表せられたり。

○解雇 本校雇文庫掛山野繁輝氏は、十二月二日願に依り雇を解か  
れたり。

○授業始の式と年賀交換會 一月八日例によりて、授業始の儀式を  
行はれたり。此日講堂の中央壇上には、御眞影を掲げられ、壇下右  
方の机上には花を飾りたり、定刻となるや正木校長を始め、職員生  
徒一同參集し校長の式辭、一同の奉拜ありたる後、正木校長は恭し  
く、勅語を捧讀し、萬歳を三唱して式を終り、夫れより順次退散し  
て、職員諸氏は別室に集り、年賀の交換を爲したり。例年此會に持  
出ださるゝ諸氏記名の大杯は惜いかな昨年火災にて燒失したるを  
以て、今年は代りにて間に合せられたるが目下その大杯の製作中  
にして、明年よりは復舊せらるべしといふ。

○本校豫備科生徒の募集 本校にては例年の如く豫備科生徒約百人  
を募集することとなり、一月二十五日の官報にて廣告せり。志願者  
は三月一日より同月十四日迄に願書を差出すべきことと定められ、  
各科へ配當すべき員數は概ね左の如くなり。

日本畫科	二十人	西洋畫科	廿五人
彫刻科	廿二人	圖案科	十人
金工科	八人	鐵造科	八人
漆工科	八人		

右の内彫刻科の廿二人は塑造部へ十二人、木彫部へ五人、牙彫部へ  
五人を配當せらるべし。猶詳細を知らんとするものは官報廣告を參  
看せらるべし。

○本校の日本畫團體成る 本校日本畫科に於ける卒業生は年々相踵  
ぎて出で、創立以來既に數百名の多きに上れるも、從來稀に二三の  
小團結を見るの外、未だ團結の組織を見ざりしは遺憾とする處なり  
しが、去る頃在京せる同科出身者數十名集合して、一團體を組織す  
る希望を可決し、夫々協議の結果、昨年十二月十七日、本校の講堂  
に於て卒業生及び在校生徒の總會を開き、茲に愈一團體を成立せし  
むべき事に決したる上「來四月上旬東京美術學校に於て展覽會を開  
催する事」會名を「東台畫會」と命名する事をも議定し、以後毎年  
一回必ず展覽會を開設する筈にて、委員に結城素明、山脇皓雲、  
勝田蕉琴、平田松堂、松岡輝夫等の諸氏を挙げ、今後大いに活動す  
る由なり。尙會長には校長正木直彦氏を推すべく、元本校長として  
緣故ある濱尾新、岡倉覺三、久保田鼎の諸氏、元教授荒木寬畝、現  
今の教授川端玉章、寺崎廣業、小堀輛音、福井江亭の諸氏をば推し  
て特別會員となしたるよしなり。

東京美術學校近事〔一〇一六。M・四五・三・二一〕

○教授の陞叙 教授大村西崖氏は、去る一月三十一日付を以て、從  
六位に陞叙せらる。

○第二十一回卒業證書授與式 本校に於ける同授與式は、本年以後  
は三月二十九日午後一時三十分より舉行せらるべしといふ。而して  
卒業製作は例の通陳列せられ、同日午後は招待者に觀覽せしめ、翌  
三十日には卒業生の父兄親戚等の觀覽を許さるべしといふ。

○本校一覽の配付 明治四十四年より同四十五年に至る本校の一覽

は、二月初旬印刷成りたるを以て、同月中旬迄に卒業生諸氏へそれ／＼配付せられたり。因にいふ今回の巻首の挿畫六葉は、其中舊版の二三を變更して、本校化學室に於て製版印刷し、末尾の敷地圖は今回新たに調製して、是れ亦本校化學室の製版印刷に成りたるものなりといふ。

○作品集第八の刷成配布 去る明治四十三年分の作品集は、事故のため印刷遅延しつゝありしが、此度刷成し、四十三年八月現在の本會特別會員諸氏へ配付せられたり。

○本校に於ける二展覽會 前號にも報じたる東台畫會（本校日本畫科生徒及出身者團體）の第一回展覽會は、三月廿九日より四月四日迄、本校工藝科教室に於て開會することに決定し、事務所を日本畫科教室に設けて、準備に忙はしく、又故春草畫伯追悼展覽會は、四月二日より同月八日まで日本畫科教室に於て開かるべく、是亦事務所を文庫内に設けて、出品受付開會準備等に忙はし。

#### 東京美術學校近事（一〇一八。M・四五・五・二九）

○教授諸氏の敘位 教授海野美盛氏は正六位に、教授福井信之進、沼田勇治郎、小堀鞆音の三氏は正七位に、孰れも三月一日付を以て陞叙せられたり。

○上原氏の解囑と後任 手工授業囑託の上原六四郎氏は、三月三十一日付を以て依願囑託を解かれ、其後任として、東京府豊島師範學校教諭原田義作氏へ、同日手工授業を囑託せられたり。

○岡田〔秋嶺〕助教授の昇任 同氏は三月三十一日付を以て、東京

女子高等師範學校教授兼本校教授に昇任せられ、高等官七等に敘せられたり。

○川端〔玉章〕教授の辭職 去る明治二十一年十一月本校に入り、開校以來日本畫科に教鞭を執られ、本校のために盡されし功勞鮮からざる川端教授は、數年來の宿痾癒えざるの故を以て、遂に辭表を呈出せられしが、四月二日、特に五級俸を賜り、別に千圓の賞與金を下賜せられ、願に依りて本官を免ぜられ、又四月二十日に至りて、特旨を以て位一級を進められ、從四位に敘せられたり。

○正木〔直彦〕學校長の出張 正木學校長は四月十日より十八日迄、京都へ出張せられたり。

○掛員の勤務替 會計掛安井匡雄氏は、三月八日文庫掛を命ぜられたり。

○第廿一回卒業式 本校第二十一回卒業證書授與式は、去る三月廿九日午後一時三十分（昨年迄は午前なりしも本年よりは午後に改む）式場と定めたる講堂に於て舉行せられたり。式場は一段高き所に卓子を据え後ろに金屏風をたて、兩側の大花瓶には爛熳たる櫻花を中心に各種の花を挿みたり。一同着席するや、正木〔直彦〕學校長は一場の式辭を述べられ、次に各本科生六十人、撰科生十人、圖書師範科生二十一人合計九十一人に卒業證書を授與せられ、尋て卒業生に對して告辭を陳べられ、次に長谷場〔純孝〕文部大臣の訓辭、卒業生總代西洋畫科御厨純一氏の答辭ありて式を終り、卒業生一同は職員諸氏と共に紀念の撮影をなし、來賓は日本畫科教室に陳列したる各科卒業製作を觀覽し各茶菓の饗應を受けたり。猶翌三十日は職員卒業生關係者の觀覽を許したり。その卒業生姓名、大臣の

訓辭、生徒總代の答辭等は左の如し。

卒業生姓名

日本畫科（○印は圖畫教員志望者）

- 本科 ○篠原 圓次 長野縣平民
- 同 ○福島外喜雄 石川縣平民
- 同 ○大山 逸八 新潟縣平民
- 同 ○岡村 榮 香川縣平民
- 同 ○長井 智覺 佐賀縣平民
- 同 ○白 玄 德島縣平民
- 同 ○小森 二郎 石川縣土族
- 同 ○井上 利正 島根縣平民
- 同 ○川幡伍一郎 東京府平民
- 同 ○山本信太郎 兵庫縣平民
- 同 ○清水 潔 新潟縣土族
- 同 ○濱谷榮次郎 富山縣平民
- 同 ○戸田 正夫 岡山縣平民
- 撰科 中村 恒吉 静岡縣平民
- 同 菊澤六兵衛 埼玉縣平民
- 同 奥山常太郎 三重縣平民
- 西洋畫科（○印は圖畫教員志望者）
- 本科 ○御厨 純一 佐賀縣平民
- 同 神津 港人 長野縣平民
- 同 ○北島 淺一 佐賀縣平民
- 同 佐藤哲三郎 新潟縣平民

同 ○工藤 三郎 北海道平民

同 ○清原 重一 德島縣平民

同 三國 久 新潟縣平民

同 ○杉江 春男 廣島縣土族

同 ○齋藤 知雄 東京府土族

同 片多 徳郎 大分縣平民

同 大江九二太郎 東京府平民

同 ○淺井 松彦 東京府平民

同 堤 龍雄 山梨縣平民

同 ○井上 清一 廣島縣平民

同 萬 鐵五郎 岩手縣平民

同 ○倉智 亮三 福岡縣平民

同 平井 爲成 香川縣平民

同 ○山下鐵之輔 福岡縣平民

同 栗原 忠貳 静岡縣平民

撰科 野元 義雄 鹿兒島縣土族

同 金澤 重治 東京府土族

本科 北村 西望 長崎縣平民

同 新田藤太郎 香川縣平民

同 吉田 三郎 石川縣平民

同 矢野 誠一 香川縣平民

同 藤谷 嘉一 石川縣平民

同 須田 速人 宮城縣平民

同 肥田 武馬 香川縣士族  
 同 加藤 孝三 千葉縣平民  
 同 數見 定一 東京府士族  
 同 山川 豐松 石川縣平民  
 撰 石川 久吉 愛知縣平民  
 同 金田 勇 東京府平民  
 同 富永 光一 山形縣士族  
 同 富永 光一 山形縣士族  
 圖案科(○印ハ圖畫教員志望者)  
 本科 信田 了平 富山縣平民  
 同 山崎 陽一 山梨縣平民  
 同 今 和次郎 東京府士族  
 同 ○和田 順顯 石川縣平民  
 金工科  
 本科 神矢 教親 高知縣平民  
 同 寺島 恕 富山縣平民  
 同 田中 賑吉 埼玉縣平民  
 同 野口 六三 東京府士族  
 同 根尾 謙兒 廣島縣士族  
 同 漆間 宏 北海道平民  
 撰 能守安太郎 東京府平民  
 同 水沼 靜 愛媛縣平民  
 鑄造科  
 本科 杉田 精二 長野縣平民  
 同 山本 菊一 長野縣平民

同 小林俊之助 宮城縣平民  
 同 山成 次夫 岡山縣平民  
 同 桑野 寬 東京府士族  
 同 勝野 久實 東京府士族  
 漆工科  
 本科 香川源四郎 香川縣士族  
 同 古川 茂一 石川縣士族  
 同 古川 茂一 石川縣士族  
 同 幕谷 四郎 三重縣平民  
 同 西岡 瑞穂 高知縣平民  
 同 △末 廣長 大分縣平民  
 同 △眞鍋 蕃 香川縣平民  
 同 志賀九十郎 北海道平民  
 同 小野久寿馬 高知縣平民  
 同 花田 義平 山梨縣平民  
 同 松崎巍七郎 福島縣平民  
 同 △曾根末次郎 東京府士族  
 同 △高瀬猪一郎 大阪府平民  
 同 小塚義一郎 靜岡縣平民  
 同 福島 章 島根縣士族  
 同 △鹽月 善吉 宮崎縣平民  
 同 荒川 潔 靜岡縣士族  
 同 大河内定雄 茨城縣士族  
 同 市川 邦彦 靜岡縣士族

- 權藤 種男 大分縣士族
- 海老原 茂 群馬縣士族
- 霜田 利平 埼玉縣平民
- 圓藤 義雄 廣島縣平民
- 佐藤謙太郎 秋田縣士族

文部大臣訓辭

東京美術學校が、卒業證書授與ノ式ヲ舉クルニ方リ、一言ヲ述ヘテ卒業生諸子ノ爲ニ祝スルハ本大臣ノ喜フ所ナリ。

願フニ美術ハ終身ノ事業ナリ。畢生ノ研修尙其ノ堂奥ニ臻ルコト能ハサランコトヲ恐ル。而モ諸子ハ本校ニ於テ、既ニ其ノ根柢ヲ養ヘルモノ、今ヨリ以往益々勗メテ懈ルコト無クンハ、寸進盡歩久ウシテ克ク、古名家ノ壘ヲ摩スルニ至ルモ、豈必ス企及スヘカラストセンヤ。

若シ夫レ美術カ風教ノ上ニ迨ホス影響ノ至大ニシテ、美術家カ國家社會ニ對スル責任ノ至重ナルモノアルハ、特ニ言說ヲ要セサル所、諸子ハ宜シク自ラ奮ヒ自ラ警メテ、技能品性併セ養ヒ、技勝レ神高ク、大ニ世道人心ヲ作興スルニ足ルヘキ作品ヲ出シ、以テ美術家ノ本分ヲ盡サンコトヲ期スヘシ。

教育ノ任ニ當ルモノハ、忠實職務ヲ奉シ、惓誠生徒ヲ導キ、啻ニ技藝ノ師タルノミナラス、人格德操ニ於テモ、亦克ク衆生ニ範タランコトヲ期セヨ

明治四十五年三月二十九日

卒業生答辭

今日明治四十五年三月、春風駘蕩トシテ櫻花將ニ東臺ノ天地ヲ彩ラントスルノ時、本校第二十一回卒業ノ盛式ヲ舉行セラル、茲ニ文部大臣閣下ヲ始メ、朝野諸公ノ賁臨ヲ忝ウシテ、特ニ懇篤ナル諭辭ヲ賜ハルノ光榮

ヲ得タリ。生等ノ喜悅何モノカ之ニ如カン。

生等本校ニ學ブコト既ニ五星霜、今ヤ其ノ業ヲ卒ヘテ聊カ藝術ノ輪廓ヲ知り、自己ノ歸趣ヲ覺リ、過去將來ノ趨勢ヲ窺フ事ヲ得タルハ、之レ偏ニ、校長及諸先生ノ熱心懇切ナル、指導ト薰陶トニ因ラズンバアル可カラズ。

夫レ美術ノ蘊奥ハ、天才ガ畢生ノ努力モ亦極ムルニ難シトカ、生等短才ニシテ能ク其奥妙ヲ極メ、有終ノ美ヲ收ムル能ハザルヲ恐ルト雖モ、逡巡ハ之シ<sup>レ</sup>婦女子ノワザ也、小成ニ安ンゼス、萬難ニ撓マズ、一意専心、益々研鑽ニ勉メ、修養ニ勵ミ、以テ斯界ニ貢獻シ高恩ニ酬ヒ、延イテハ國家盛運ノ一助タラムコトヲ期セン哉。

若シ夫レ專念教育ニ従事スルモノハ、本校教養ノ趣旨ニ則リ、忠實熱心其職ニ盡シ、且又社會ニ於ケル美術思想ノ普及ニ努メ、國家ノ生等ニ豫期スル所ニ悖ラザランコトヲ期ス。

聊カ蕪辭ヲ述ベテ答辭トナス。

明治四十五年三月二十九日 東京美術學校卒業生總代 御厨 純一

卒業生科別人員比較

科別	四十四年	四十五年
日本畫本科	一一	一三
同 撰科	四	三
西洋畫本科	一一	一九
同 撰科	三	二
彫刻 本科	六	一〇
同 撰科	三	三

○新入學生 本年に於ける生徒募集の各科中にありて、募集人員に超過したるは、日本畫科、西洋畫科、圖案科、圖畫師範科にして、その撰抜試験は、四月一日より施行せられたる結果に依り、此他の科は各無試験にて入學を許され、四月六日の官報にて發表せられたり。その人名及比較表等左の如し、

豫備科

日本畫科志望

田代 一郎 佐賀平	森 茂雄 福岡士	島内 武敏 高知平
梅田 哲治 東京士	秋本 一郎 山口平	土肥 實香 川士
飯野 三六 群馬平	河口 浩吉 石川平	小松 清乘 香川平
勝山 恆躬 山形士	佐々木 義政 香川平	福田 久也 東京士
渡邊 政一 東京士	吉田 毅 大分平	關戸 三郎 右衛門 石川平
狩野 威信 東京平	關澄 正巳 東京平	青木 寬四郎 長野平
田上 尚之 富山平	矢部 友衛 新潟士	井桁 晋 東京士
富田 稔 彦 岐阜士	寺崎 滿治 東京士	

西洋畫科志望

井上 眞 東京士 吉田 鹿次郎 福岡平 古谷 忠夫 山口士

川合 改次郎 静岡平 吉田 健夫 東京士 保田 重右衛門 和歌山平

石黒 義保 長野平 三崎 道夫 福井士 新井 喜惣治 埼玉平

徳田 多助 東京平 鈴木 淳 東京士 高橋 萬之丞 長野平

岡本 喜一 東京平 石原 玉吉 埼玉平 飯塚 章 三埼玉平

恩地 孝四郎 東京平 大村 松之助 栃木平 三浦 秀之助 大阪平

三栖 敏雄 和歌山平 古藤 福一 新潟平 清水 七太郎 岩手平

鈴木 巖 愛知平 安部 一二 太郎 岡山平 佐野 左司 馬 福島平

飯田 勇 山口士 林 正三 茨城平 高梨 辰神 奈良平

彫刻科 塑造部 志望

唐杉 誠一 東京士 大塚 辰夫 大分平 有賀 紀元次 長野平

青柳 強彦 栃木平 貝塚 七郎 三重平 伊藤 直臣 熊本士

片岡 角太郎 宮崎平 木村 泰雄 石川士 香山 藤祿 長野平

升谷 和一郎 石川平 都賀 田勇馬 石川士 飯田 專造 富山平

彫刻科 木彫部 志望

飯田 九一 神奈川平 松平 榮之助 東京平 中村 秀淨 埼玉平

北原 鹿次郎 福岡平 奥原 謙太郎 東京士

圖案科 志望

石田 瑛 石川平 富田 基一 東京士 安江 孝治 石川士

辻 正幸 富山平 小澤 蘇來 群馬平 小西 繁太郎 香川平

田代 哲郎 福岡平 杉本 盛二郎 石川士 野澤 道平 愛知平

南 善造 大阪平 吉年 素彦 大阪平

金工科 志望

岩田 藤七 東京平 高梨 靜治 新潟平 田代 辨次郎 栃木平

森	彰東京士	小島	公平東京平	山縣	政夫廣島平
田上	嘉助富山平	井上	英一東京士		
	鑄造科志望				
古河	令吉福井士	入江	憲吉奈良平	伊藤	喬富士士
	漆工科志望				
香川龜三郎	香川士	村田	榮吉石川平	三好	民藏鳥取平
竹村	猛三重平	水町和	三郎佐賀士		
	圖畫師範科				
古屋	浩藏山梨平	山崎善次郎	佐賀士	中安	保靜岡平
太田	新吉宮城平	品田七太郎	新潟平	村上	稠香川士
多米	孝靜岡平	滿藤馬之助	岡山平	田村	美勇山梨平
佐藤常五郎	大分士	佐々木正明	岐阜平	安ノ井道三郎	京都平
山口	俊雄長野士	湯澤	浩三茨城士	眞先	香苗兵庫平
菅野	廉宮城士	岡部	虎雄福島平	岩壁	三郎神奈川平
穴水	義行青森平	澁澤曉三郎	群馬平		

以上の中鑄造科の伊藤喬は、四月九日入學許可。

入學志願者許可者比較表

志望科別	昨年の志願者	同上	本年の志願者	同上
日本畫科	二〇	二〇	三三	二三
西洋畫科	八四	三六	九六	二七
彫刻科(塑)	九	九	一二	一二
同科(木)	〇	〇	五	五
同科(牙)	〇	〇	一	〇
圖案科	二六	一〇	一三	一一

○研究科入學 左の諸氏は各頭書の日を以て、各研究科へ入學を許さる。

金工科	六	五	八
鑄造科	四	四	三
漆工科	五	四	五
師範科	四九	二二	五七
計	二〇三	一一〇	二三三
三月廿九日	西洋畫科	御厨	純一
同	同	神津	港人
同	同	北島	淺一
同	同	佐藤哲三郎	
同	同	工藤	三郎
同	同	清原	重一
同	同	三國	久
同	同	杉江	春男
同	同	齋藤	知雄
同	同	和田藤太郎	
同	同	藤谷	嘉一
同	同	寺島	恕
同	同	野口	六三
同	同	根尾	謙兒
同	同	片多	徳郎
同	同	萬	鐵五郎
同	同	淺井	松彦



同	同	栗原 忠貳
同	同	金澤 重治
同	彫刻科	吉田 三郎
同	同	肥田 武馬
同	同	松村秀太郎
同	鑄造科	杉田 精二
同	漆工科	香川源四郎
同月九日	彫刻科	北村 西望
同月十九日	日本畫撰科	中村 恒吉
同	同	奥山常太郎
同	圖案科	今 和次郎
五月一日	師範科	太田 久男

○校内に於る二展覽會 前々號にも記したる如く三月末より四月に涉りて本校内に於て、東台畫會及故菱田春草氏追悼の二展覽會は開かれたり。東台畫會は工藝科教室にて三月廿九日より四月四日迄開かれたるが、出品者は卒業生及生徒諸氏中の有志者にして出品百餘點に過ぎず、作品亦觀者の眼を惹くもの多からず、聊か物足らざる感ありしは遺憾の至りなり。明年の第二回よりは會員諸氏も奮つて出品すべしといへば、今より刮目して待つべきなり。故春草氏展覽會は日本畫科教室と講堂とを以て會場に充てられ、四月二日より六日迄開會せらる。出品三百餘點にして皆是氏が獨得の筆に成れるもの、其陳列は東京美術學校時代、日本美術院時代、五浦時代、留學時代、代々木時代に分ち、其作品を排列せられたり。寄付畫には「下村」觀山氏の「鶉の磯」、「横山」大觀氏の「五柳先生」、「川

合」玉堂氏の「藤」、「木村」武山氏の「伊蘇普物語」、「寺崎」廣業氏の「夏秋景山水」（何れも六曲屏風）「梶田」半古氏の「花鳥双幅」「山内」多門氏の「風景二圖」等にして、其遺作は「春草畫集」と題し、畫報社より發刊せり。

○職員諸氏 高村「光雲」教授は本年還曆の壽に當らるゝを以て、門人諸氏相謀り、教授の令息光太郎氏に胸像の原型を依頼して、先頃その鑄造を了りしかば、去る四月四日を以て、門人諸氏新坂下の伊香保に集り、壽像の贈呈式を擧げたりと。△教授石川光明氏は、不幸にも三月廿六日の午前三時、邸宅全焼の厄に遭遇せられ、從來蒐集せられし珍什はいふに及ばず、製作中の加茂祭り行列も、家財器具も何一つ取出すの違なく、所謂着のみ着の儘にて避難せられしは、誠に御氣の毒の至りにして、目下は上野櫻木町三九に假寓せられつゝあるが、一二ヶ月の後再築出來の上は、元の處に引移らるべしといふ。△寺崎「広業」教授は先頃小石川區關口町百八十番地（電話番町二六一九番）に移轉せられたるが、今後は都合によりて、月曜日午後の外は諸人に面會せざること定められたりと。△先年末風邪に罹られてより兎角健康勝れず、引籠り居られたる古宇田「実」教授は、一時鎌倉に轉地療養せられたるが、漸次快癒し、四月の新學期より登校せらる。△教授岩村透氏は、四月中旬本郷龍岡町二十七番地（電話下三、七九三番）に轉居せられたり。△櫻岡「三四郎」教授は三月末その實兄を喪はれたりといふ。痛惜察するに餘りあり。△波根「義三」助教授は二月末より窒扶斯にかゝり、赤十字病院に入院し、一時は危険の噂さありしが、幸に漸次快方に向はれたりといふ。△和田「英作」教授も先頃皮膚の病のため入院

せられしが、幾もなく快癒退院せられたり。

東京美術學校近事〔一〇—一九。M・四五・六・二九〕

○高村教授の陞等 教授高村光雲氏は、四月二十七日、高等官二等（勅任）に陞叙せられたり。

○千頭助教の應召 助教千頭庸哉氏は勤務演習のため、五月一日より二週間召集せられたり。

○岡田教授の叙位 教授岡田秀氏は、五月二十日從七位に叙せられたり。

○雇の拜命 本年金工科卒業の神谷教親氏は、五月三十一日本校雇を命ぜられ、金工科兼工藝化學助手を命ぜられたり。

○職員諸氏 波根〔義三〕助教は病氣全快せられ五月二十日より出勤せらる△磯野〔富之助〕書記は五月十日令闇を喪はれたり。悲痛察せらる。△島田〔佳矣〕教授は此程より住宅の新築に取掛られ、七月頃には竣成せらるべしと。△白濱〔徹〕教授は先頃小石川區丸山町五番地に邸宅を求め、移轉せられたり。△岩村〔透〕教授は相州三崎に地を卜し、目下別墅の建築中にして、本郷龍岡町の本邸新築工事も大に捗りたりといふ。

東京美術學校近事〔十一—一。T・一・九・二九〕

○教授諸氏の叙位と叙勲 教授高村光雲氏は、六月二十一日正五位に叙せられ、教授大澤三之助氏は、六月廿七日勲五等に叙せられ、

教授白井保次郎氏は、同日勲六等に叙せられたり。

○職員諸氏の出張 教授櫻岡三四郎氏は、鑄造物及鑄造上に關し、實地調査のため、朝鮮へ出張を命ぜられ、七月三十一日出發して九月十一日歸京せられ、雇小場恒吉氏もまた九月十二日付にて學術研究のため、六十日間を以て朝鮮へ出張を命ぜられ、同月十七日出發の筈。助教中村勝治郎、玉田文作、囑託關係の助、雇藤岡福三郎の四氏は、九月二十日より各卒業期生徒の修學旅行のため、八月二十三日付を以て、京都府及滋賀、奈良、和歌山の三縣下へ出張を命ぜられたり。

○畑氏の拜命 畑正吉氏は九月十日付本校雇を命ぜられ、彫刻科木彫部助手を命ぜられたり。

○職員中の美術審査委員 本校教授中黒田清輝、岩村透、高村光雲、石川光明、竹内久一、久米桂一郎、岡田三郎助、和田英作、寺崎廣業、白井保次郎、小堀鞆音の諸氏は、第六回美術展覽會開設に付、美術審査委員會委員を仰付けられ、高村光雲氏は第三部主任を、小堀鞆音氏は第一科員を、寺崎廣業氏は第一科第二科員を、黒田、岩村、久米、岡田、和田の五氏は、第二科員を、高村、石川、竹内、白井の四氏は、第三科員を執れも六月二十一日付を以て命ぜられたり。

○大喪中の心得と奉悼 本校にては在京者へ夫々通知を發し、大正元年八月二日午前九時二十分より、本校職員生徒一同を講堂に集め、大喪に關し正木學校長より訓諭する所あり。當日講堂の正面には、御眞影を掲げ奉り、一同の集合するや、先づ最敬禮をなし、次に正木學校長は、側らの壇上に立たれ、中心の悲哀禁へがたきもの

ゝ如く、折々眼をしばたゝきて職員生徒一同誠心誠意追悼し奉る旨を述べ、尋で聖徳の廣大無邊にして、明治の大業を就し給ひしこと、並に民衆を愛育あらせられし大御心の深厚なりしこと、及政務に御精勵あらせられし事どもを説かれたる後、大喪中に於ては本校職員生徒は誠意謹慎し、華美を避け言行を戒むべき事等につき、懇々訓諭せらるゝ所あり、一同首を垂れて敬聽し、靜肅人なきが如し。十時半頃退散せり。

○大喪に關する達と揭示 文部省より大正元年七月三十一日付を以て左の通り達せられたり。

大喪に付臣民の喪期間生徒をして左の通心得しむべし

一 謹慎靜肅を旨とし御哀悼の誠意を致さしむべし

一 服裝、其他の裝飾は目立つものを避けしむべし

一 娛樂の爲にする催は之を遠慮せしむべし

以上の達と其他の通知とにより、本校にては更らに左の二ヶ條を追加して揭示せられたり。

一 制服着用の場合は左腕に黒布を纏ふべし

一 和服着用の場合は衣服の左胸に蝶形結の黒布を付すべし

○職員諸氏の講習會出張 本年夏季休業中白濱〔徴〕教授は、富山縣及岡山縣教育會主催の圖書教授法講習會へ、島田〔佳矣〕教授は例年の如く、山形及秋田縣主催の圖案講習會へ、石井〔吉次郎〕助教は鹿兒島縣主催の漆工講習會へ、坂口〔朧〕助教も、同縣主催の金工講習會へ、何れも講師として出張せられたり。

○特待生の選定 學業品行優等に依り、本年九月より一學年間特待生に選定せられ、授業料を免ぜられるべきものは、七月十五日付に

て發表せられたり。即ち左の諸氏なり。

鴻巢 善藏 (日一) 狩野 守久 (日二) 篠田十一郎 (日四)

内田他治郎 (日四) 中村彌藤治 (西二) 酒井 榮之 (西四)

牧野 虎雄 (西四) 雨田外次郎 (彫一) 堀 義二 (彫四)

谷本清太郎 (彫四) 林 威三 (圖一) 淺野 廉 (圖二)

安藤喜八郎 (圖三) 町川惣太郎 (金一) 磯野 三郎 (金四)

石崎 誠二 (漆三) 五十嵐三次 (漆三) 林 健一 (彫三)

○精勤者 昨年九月より以後、學業精勵により、七月十五日付にて精勤賞狀を授與せられたるは左の諸氏なりとす。

内田他治郎 (日 四) 鈴木六三郎 (日撰四)

河井 隆一 (西撰一) 白 常齡 (西撰四)

高木菊太郎 (彫撰一) 黒田 豊治 (彫撰一)

長塚 廣造 (彫撰一) 志摩 鶴二 (彫撰四)

前田 實 (金撰一) 石崎 誠二 (漆 三)

五十嵐三次 (漆 三) 溝淵好三郎 (漆撰四)

岩城 彌一 (漆撰四)

東京美術學校近事 [十一—二。T・一・十一・一二]

○柴助教の休職と留學 本校助教柴一雄氏<sup>[マツ]</sup>は、去十月四日休職を命ぜられ、願濟の上にて向三年間を期して、寫眞に關する化學と寫眞技術に就きて、私費を以て海外へ留學することとなり、同月二十六日神戸より乗船渡歐の途に上られたり。聞く所によれば、同氏は農商務省の海外實業練習生に選拔せられたりといふ。

○卒業期の修學旅行 卒業期の修學旅行は例の通り去る九月に於て施行されたり。従來は九月十一二日の頃よりなれど、本年は御大喪に際したるを以て、同月二十日東京を出發して先づ奈良縣に至り、次に和歌山縣下の高野山に赴き、京都近傍及滋賀縣の三井寺附近の古社寺古美術を研究して、十月十日歸京せり。指導教官は前號に記す所の如し。

○師範科生徒の修學旅行 圖書師範科三年生十七名は往復九日間を以て、京都府、大坂府、奈良縣、三重縣へ向ひ 修學旅行として、十月二十六日東京を出發したり。

○撰科生の入學 例年各科の都合によりて募集せらるゝ本校撰科生は、九月二十五日、左の如く入學を許されたり。

西洋畫撰科

山田 隆憲 嚴 智開 金 鑽永

江 新 (内三人は支那人及朝鮮人)

彫刻撰科塑造部

榊澤 清 高橋 仲治<sup>[次]</sup> 植田作右衛門<sup>[型]</sup>

同 科木彫部

田島 龜彦 駒田 濱治

同 科牙彫部

夏目 貞良

○本校設置紀念式の見合せ 十月四日は本校設置紀念日に相當するを以て、毎年其式を舉行したりしが、本年は本校玄關に屬する一棟の建物改築中にて、工事の都合上にて式を擧ぐる能はざるを以て、本年に限りて見合せことゝなれり。

東京美術學校近事〔十一—三。T・一・十二・一五〕

○正木學校長の昇叙 十一月二十日<sup>[T・一]</sup>。正木學校長は<sup>[T・一]</sup>。從四位に昇叙せられたり。

○本校新築の進捗 本校新築校舍正面玄關の一棟は、今夏の首めより新築に著手中なるが、<sup>[T・一]</sup>。家根及外部等の工事は、最早大略竣成に近づき、目下内部の工事に著手中なるが、可成本年中に竣成せしむる目的にて、當事者は頻りに督勵しつゝあり。又裏門内の處に建てらるべき一棟も十月より工事に著手し、目下頻りに土臺の築造中なるが、聞く所によれば、こは將來建築裝飾科の建物に充用せらるべしといふ。

○本年秋期の修學旅行 本年秋期の修學旅行は、大喪中に屬するを以て、非舉行説等もありたれども、結局其旨を守り且可成各科の學業に適切なる方法を取り、各科各別に教官指導の下に於て各地方に旅行することに決し、十一月十九日より三日間を以て施行せられたり。即ち日本畫科は箱根地方の名所舊蹟を探り、西洋畫科(十八日夜出發)は、甲州身延山より、富士川を下り岩淵へ出でて歸京し、彫刻科は甲州鹽山地方の風光を見、古寺を訪ひて御嶽山に赴き、圖案科は日光地方の建築と風光を探るべく、金工科は静岡縣沼津地方を採勝し、三島神社の寶物を拜觀して舊趾を豆州に尋ね、修善寺に至り、鑄造科は房州に至りて清澄山及び小湊の誕生寺を訪ひ、漆工科(十八日夜發足)は福島縣若松に赴きて漆器製造の狀況を視察し、師範科は熱海より三島に至り、各廿一日を以て歸京せり。

○本校圖案科卒業生生徒の受賞 先頃より農商務省商品陳列館にて開催中なる第六回商品改良會に於て、十一月十九日發表せられたる各種圖案の受賞者中、本校圖案科の卒業生、生徒諸氏にして、賞選に入りたるもの左の如し。(○印卒業生)

金 牌  
日本各時代意匠  
應用陶器皿圖案 京都 ○加藤 卓爾

銀 牌  
蔘繪手袋箱圖案 東京 藤村喜四郎

色蔘繪葉卷入圖案 東京 前田健次郎

陶製菓子盛器圖案 群馬 ○伊井彌之助

銅 牌

西洋食器圖案 石川 ○三野 雅堂

蔘繪葎用器圖案 東京 淺野 廉

色蔘繪手袋箱圖案 同 飯野 眞伍

蔘繪卷葎入圖案 同 伊藤 豊

東京美術學校近事〔十一—四。T・二・一・一四〕

○關野小場兩氏の歸京 囑託關野貞氏と共に、朝鮮古墳内の裝飾畫取調並びに摸寫のために赴かれし小場〔恒吉〕助手は、客年十二月七日歸京せられ、關野氏は同月十五日歸京せられたり。

○石田〔英一〕助教の解除 去年十月下旬勤務演習のため召集せられし同氏は、十一月十四日を以て、召集を解除せられたり。

○岩村〔透〕教授外三氏の陞等 昨年十二月十四日付を以て岩村教

授は高等官三等に、白山〔松哉〕教授、寺崎〔広業〕教授、古宇田〔実〕教授は、各高等官四等に陞叙せられたり。

○岡田囑託の名譽 本校囑託の工學士岡田信一郎氏は、大阪公會堂の設計案競技員十五名の中に撰ばれ、昨夏來設計中なりしが、去る十一月二十九日審査成績を發表せられたる結果によれば、同氏は一等當選者として、金三千圓を贈與せられたり。

○圖書師範科規定中の改正 舊臘十二月十八日付を以て、明治四十年發布の文部省令第十八號本校圖書師範科規定中左の通り改正せられたり。

第四條第一項中「地方長官」ヲ「當該學校長」ニ、同條第二項中「地方長官」ヲ「學校長」ニ改ム。

本令ハ公布ノ日ヨリ之ヲ施行ス。

如上改正の要旨は、從來師範科生徒志願者は、地方長官即ち道廳府縣知事より推薦し來りたれども、今回之れを被推薦者の出身學校長より直接本校へ推薦することとなりたるものにして、此改正に伴ひて、本校規則中に掲記せる同科規程もまた從ひて改正せられたり。

### 関連事項

#### ① 東京工芸圖案競技會

明治四十四年末、東京府は工芸の發展を推進する計畫を打ち出す。一つは、第二回勸業展覽會に一万圓の補助金を決め來年度予算に計上したこと。もう一つは、工芸意匠家奨励の圖案競技會を翌年二月一、二日に開くことにし、その出品規則を發表したことである。